

に入った。

●平和利用●「記者時代、平和利用の可能性をきちんと学ぼうと研究者らと勉強会をつくった。

もつけ主義で核に手を出すのはけしからんと、仲

は、懐疑的なものへ変わってきた。だからこそ、

●核兵器●「『軍事の問題は政治に任せろ』と

産業界や科学界と国民の橋渡し役として、身内にの声もあり、内輪でけん

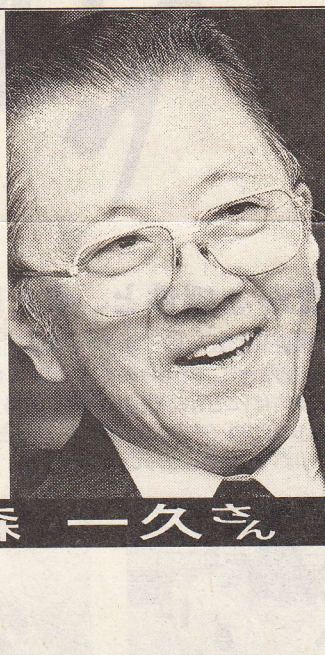
原爆投下の三日前、両親が心配で京都から実家に戻った。爆心地から一

夫婦、めいの五人を亡くし、生き残った自分も半年寝込んだ。そんな重苦しい回顧を語り始めたのはつい最近。話すたびに、目じりをぬらす。最近、

原爆の炎の中を生き残り、戦後は原子力の平和利用を推進する。「核」とともに過ぎた半世紀を象徴するかのよつな人生である。

●原子力●「人類はこれまで第三次原爆戦争なしに生きてこられた。でも本当にこのまま続くのか、極限の科学技術である原子力を私たちはきちんと使っているのか。これまで落第したとは思わないが、さて及第かどうか。まだ神に試されているのかもしれない」

旧制広島高から京都大へ。故湯川秀樹博士の下で理論物理学を学んだ。科学雑誌記者を経て、平和利用を推進する日本原子力産業会議（原産）に、一九五六年の創立とともに



■日本原子力産業会議副会長

森 一久さん

問題続きの開発体制 身内に厳しい視線

もりかずひさ・広島市中区出身・72歳

●モラル●「あの日の情景は、地獄なんという生やさしいものではなかった。僕の体に植えつけられているように思う。なぜ生き延びたのか、考えらるたびにつらい。悩む。でも、今の事故隠しに見られるモラルハザードにしても、結局はだれもが生きる意味に悩みながら解決策を探るしかない。プルトニウムが悪魔じゃない。それを軍事に使う人間が悪魔なんだ。僕ももっと悩めと生かされている（ふしゅ）」

間と財界に抗議に行った。りしたもんです。すると『間違いない開発をするため、外で文句を言うばかりでなく中に入れ』と逆に説得された」

相次ぐ原子力施設の事故隠しなどで、市民が原子力開発に向ける視線

東京TALK 東京TALK 東京TALK